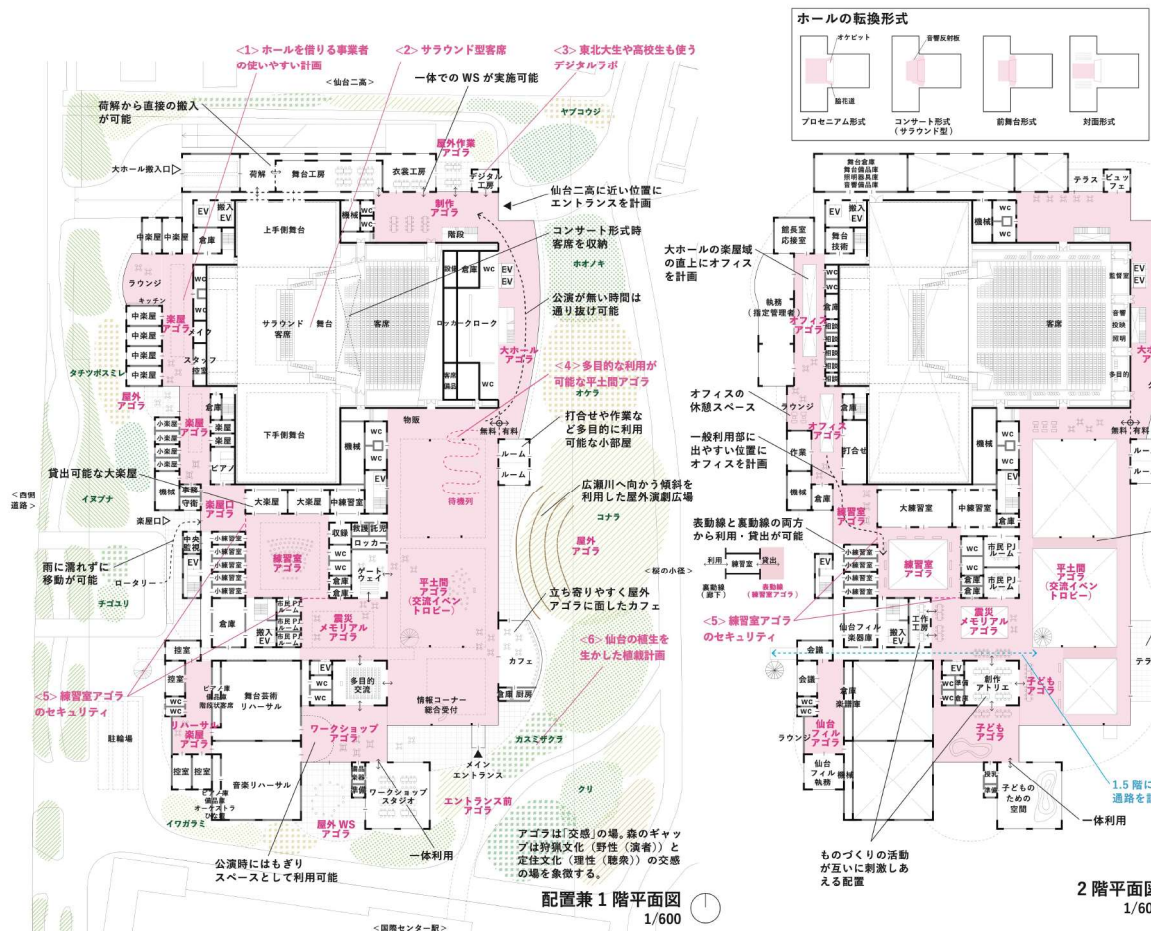


# わたしたちは、日常をどう生きるべきかー「あいだ」のための新しい建築計画

新しい建築に関わるのは、さまざまな目的を持って、あるいは無目的に訪れる人々です。それぞれ異なった活動と活動の「あいだ」をつくりだし、そして「あいだ」が異なった活動をつなげていく。それらが共存する状況そのものが建築をつくっていく風景をつくります。

建築計画は、さまざまな活動に最適化した施設（音・遮音性、音響性能、制作に適した可変性、演出装置、展示に適した壁面構成や照明、くつろげる快適性など）を持つ機能諸室＝ルームと、それらの「あいだ」を行き交いながら他の目的を持った人々との出会いや交流がうまれる広場のような場所＝アゴラでできています。特定の活動ごとに、アゴラとルームの組み合わせ＝クラスターがあり、建築の全体はこのクラスターの配置計画によって成立しています。「あいだ」＝アゴラを行き来することで新しい世界に気づき、開かれていくこと、それがこれからの日常になるはずで。



## アゴラ：活動のまとまりとその連続



## 市街地と山なみの後縁をなぞる外観



## キーワード解説

- <1> ホールを借りる事業者の使いやすい計画**  
ホールを借りる事業者が使いやすく分りやすいバックヤードの計画と、招待客を呼びやすいVIP室、専用ホワイエなど、リピートしてもらい収益化しやすい建築計画とする。  
(→7> インクルーシブなサブ観覧席)
- <2> サラウンド型客席**  
コンサートのサラウンド型客席配置が可能な、客席を備えたレール上を動く3連の可動音響反射板が主舞台背面に収納されている。
- <3> 東北大生や高校生も使うデジタルラボ**  
近年映像を使った演出が増えおり、デジタル技術の探求と蓄積は施設全体の運用にも重要な機能を果たす。これは東北大や仙台二高の学生にも開かれ、地域のラボとしても機能する。また、学生に影アナを任せたり運営ボランティアに参画してもらおう際の拠点にもなることを目指す。
- <4> 多目的な利用が可能な平土間アゴラ**  
ひとつのイベントだけでなく、大小いくつかの活動が並行して共存でき、さまざまな偶然の出会いを触発する。そのため巨大な一室空間を吸音効果を期待したカーテンで、3つのスペースに仕切れるようにする。また、大ホール公演の際には待機列やショッパ、関連イベントが他の活動と並行して行えるような配置とする。  
市道渡橋通線からの東西貫通道路の出口が平土間アゴラに通じている。
- <5> 練習室アゴラのセキュリティ**  
練習室アゴラが複数連なり、また閉鎖可能な建具で出入口を仕切ることができ、プラ使用と市民使用の範囲を調整でき、表方と裏方といった二分法ではないガーデンジョナルな関わり幅をつくる。
- <6> 仙台の植生を生かした植栽計画**  
敷地が位置する仙台市の丘陵部は、常緑広葉樹林帯から冷温帯の落葉広葉樹林帯へ移行する推移帯であり、縄文時代から植生帯はブナを主とするブナクラス域「夏緑広葉樹林」をはじめ、多彩な自然植生が発達していた。屋外空間においては植栽計画であるモミイヌナリンと二次林であるコナラ・クリ林、アカマツ林がアゴラのようにモザイク状に展開する植栽計画とし、多様な居心地のよいスペースをつくる。それぞれ異なった活動と活動の「あいだ」と屋外空間の多彩な植生で構成される森の「ギャップ」が、異なった活動をつなげていく。
- <7> インクルーシブなサブ観覧席**  
小さな子どもや障がいのある人や人の多い空間や気持ちの高ぶりを抑えにくい人など、カムダウンとしての機能を持つサブ観覧スペース。また、企業に通常でスペース使用料を販売してVIP席としても使用が可能。
- <8> 大ホールから屋外テラスへ**  
ホールホワイエからは、屋外のテラスに出ることができ、屋根の下から眼下に広がる仙台市の街並みを一望することができる。

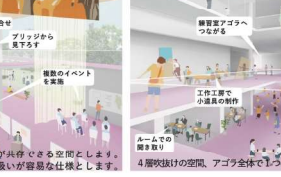
## 大ホール断面イメージ 1/300



## 平土間アゴラ



## 震災メモリアルアゴラ



## クワイエットルーム



## 楽屋アゴラ



## 断面図 1/600

